蘇った「こだま伝説」
――アボリジナル口伝とライトソンの文学――

竹内佑利子
（百々佑利子）

一、はじめに

小文では、オーストラリア作家パトリシア・ライトソン（一九二三――）作の長編小説『いにしえの少女バルイェット』（一九八九）及び、物語の基となったアボリジナル口伝「こだま伝説」を取り上げる。

「こだま伝説」は、オーストラリア大陸西南の角をテリトリーとする複数の部族が伝えてきた。伝説が伝えられている範囲は、採録されたかぎりでは、西オーストラリア州オールバニからブレマー湾まで。口伝の主人公は、美少女バルイェットと、彼女を同時に恋した義兄弟の若者二人、それにスターリング山地やトゥールナップ山、そしてブラフ山に共鳴してやまない「こだま」である。

文字で書きとどめられ保存されるようになったアボリジナル口伝は、他の多くの無文字民族のそれと同様力を失っていった。「こだま伝説」もその一つである。

一方白人入植者の子孫であるパトリシア・ライトソンは、一九五〇年代後半から、文字の力で、文字化によって失われたアボリジナル口伝の力を蘇らせてきた。一九八九年に出版された『いにしえの少女バルイェット』執筆後、ライトソンは三〇年以上に及ぶアボリジナル口伝の蘇生の試みをいったん終えている。

貴重な資料としての「こだま伝説」を継承してきた口伝の力、伝説の内容、伝承者および採録者の背景、そしてライトソンのライフワークの仕上げともいうべき「バルイェット」における口伝の蘇生について考察し述べていくことになる。

二、口伝の力

口伝の力は、幾つかの視点から検証しなければならない。伝承継続を可能にする民族のエネルギーも力であるし、伝承してきた集団によって賦与される権威も、口伝の力の一面であり、語り部自身の力もある。

口伝に関わる民族的エネルギーに関していえば、文字

を持った民族は早くにそれを失っている。「ヨーロッパにおいて口伝の語り部は絶滅動物の仲間入りをした」とL・ホンコ国際口承文芸学会会長から聞いたことがある（一九八四、ベルゲン）。日本も欧州型に近いだろう。オーストラリア・アボリジニーズやニュージーランド・マオリなどオセアニア二大地域の無文字民族は、口伝を継承するエネルギーを約二百年前まで維持してきた。ただし、「こだま伝説」が採録された一八八〇年代には、少なくともこの伝説は語り伝えられていた。地域によってオーストラリアでは百年の差があることになる。しかしそのアボリジナル口伝も、先輩のアメリカ大陸の先住民、後輩のアフリカ諸民族とともに、程度の差こそあれ、民族的エネルギーが文字に吸い取られて力を失っていった。

口伝は語り部が記憶し、公開し、さらに次世代へ口頭でバトンタッチすることで保存されてきた。口伝の権威は、口伝の意味するところと語り部とに賦与される。継承作業には、集団成員の多数が関わらなければならない。そして成員多数が関わりを持った作業には、実際的かつ心情的な権威が伴う。実際的な権威は、口伝が集団あるいは個の生存に関わるものであるとの認識から生じる。心情的な権威は、自ら関わった作業に対する愛着、自己正当化から生じる。そしてこれらは集団成員が一致して了解している権威であった。だが、それも失われていった。

語り部が集団成員の中に占める高い地位自体が、いまでは昔語りである。語り部の口は、生きている人間のそれであり、生身の人間にできることには限りがあった。この「限度」は語り部の権威を強める要素でもある。機械でない語り部に、一人一人に同じ話を繰り返して語る余裕はない。したがって語りの場が設けられ、複数の聞き手が列席する。つまり語り部は、物理的な限度ゆえに常に大勢の聞き手を動員できる立場にあった。そこから権威も誇りも生じる。聞き手側からみれば、口伝の意味するところを集団成員が分かち合うことができるという効果があった。アボリジナルの集団作業を観察して、無口な人々（だから動物に近いのではないか）と誤解した初期開拓者がいたという。食料調達から季節移動まで基本了解事項がいきわたっているため、予測可能な範囲における作業中に口を開く必要はなかっただけのことである。語りの場は盛況であった。しかし白人入植後のアボリジナル人口は激減した。テリトリーを奪われ、若者は都会に出、部族の絆が絶たれた。語り部の権威でなく、語り部そのものがいなくなった（一九九〇、クーロン）。

伝統的な語りの場は消えたが、口伝の中身まで消滅したわけではない。ヨーロッパ昔話や日本昔話に関心を持

つ人々が絶えたことのないように、アボリジナル口伝に関心を抱く人々が様々な形で採録に携わった。資料として掲載する「こだま伝説」もその実りである。しかし博物館や図書館に保管されている文字になった聞き書原稿は、集団の存亡をかけて身体じゅうを耳にして聞かなければならなかったかっての口伝の語りの場の雰囲気を、再現するものではない。採録原稿であれ本であれ、アボリジナルの人々にはにせブランド商品とも生命のない抜け殻とも見えるだろう。異文化を背景とする白人側の大多数にとって口伝の中身は意味を持たなかった。近代国家オーストラリアの初めの百年間は、無文字民族の口伝が風化するいっぽうの時期であった。

しかし二〇世紀になって二度の大戦中に、白人とアボリジナルが一つざんごうの中で助け合うというオーストラリア近代国家史上初の体験を経て、先住民対白人侵略者という図式に、変化が兆してくる。それはアボリジナルの公民権など政治的な面の成果にも現れたし、数は少ないが文学者もまた、異文化間の溝に心を留めて架橋工事を始めていたのである。

三、義兄弟の掟

二章で述べた口伝の力に関わる図式は、オーストラリア大陸西南の土地の複数の部族が語り伝えてきた「こだま伝説」にもあてはまる。そしてパトリシア・ライトソンの文学『いにしえの少女バルイェット』は、さらにはっきりと口伝の消長について語る。

「こだま伝説」は、かってアボリジナル社会において、部族が近隣の部族と友好関係を結ぶのに最もうまく機能していた「義兄弟」制度に関わる話である。義理の兄弟の関係は、自分の意志で結ぶものだから、生まれながらの兄弟、言い替えれば偶然の結びつきよりも責任ある関係として、守らなければならなかった。一種の契約の概念である。

義兄弟の掟のなかで最も重要なものは、義理の兄弟のいる部族に、武器を向けてはならないというものだ。決して戦うことができない。義兄弟は分身のようなものと考えられており、自分の分身を預けた部族に刃向かうことは、恥ずべき自殺行為とみなされた。他部族の若者と義兄弟の契りを結んだ若者の数が多ければ多いほど、部族の安全は保障されていた。最も安全なのは、テリトリーを囲む近隣部族の全てに、義兄弟がいる状況を築くことである。義兄弟の契りは濠であり砦であった。絆でがんじがらめになっていれば、火種があろうと武器をとっての戦いはできない。となれば、話合い以外に紛争解決の手だてはない。ナランジェリ部族のリーダー、トム・トレボロ氏が、アボリジナル諸部族は現代のどの国より

も民主主義に徹していたと胸を張るのも道理である（一九九〇、クーロン）。

義兄弟の不戦の誓いは、テリトリーを接する諸部族の了解事項であった。そして各部族は、多大なエネルギーを費やして若者に旅をさせた。訪れた先の部族の年齢を同じくする若者と義兄弟の契りを結ばせるのが目的である。義兄弟の絆をどの若者と結んだかは、身体に刻まれたしるし（入墨）で誰にでも一目でわかるようになっていた。「こだま伝説」に登場する義兄弟は、背中に入墨がある。これは物語に先立つ旅のあいだに、背に入墨をする風習のある部族の若者と、義兄弟の約束を無事済ませたという証拠である。

「こだま伝説」は、義兄弟が争いあい殺しあった悲劇である。この悲劇は、長く大陸西南部の諸部族に伝えられていた。二度とこのような悲劇を繰り返してはならないという戒めの意味と、その悲劇のもととなったバルイエットを山に閉じ込めたことへの理由づけのためであった。山を聖域化する機能も果していた。しかしその口伝も、部族社会が崩れてから意味を失う。部族社会が崩壊の道を辿りはじめた時期については、「イィルガァの証言」の章で述べる。白人がテリトリーに侵入し、ブッシュを開拓して牧場に変えたときから、義兄弟口伝は力を失った。語る場がなくなり、語り部がいなくなり、口伝を継承させようとする民族のエネルギーも枯渇したのである。

ただし、侵入者、強奪者、迫害者として押しかけた入植者のなかに、イィルガアら、アボリジナル口伝をまだ少しは覚えている部族の民に興味を抱く者もいた。そういう人々が口伝を集め、文字に記した。百年後にそれを読んだすぐれた文学者が、義兄弟の掟にふたたび光を与えた。この関わりを明らかにするために、「こだま伝説」およびパトリシア・ライトソンとその作品『いにしえの少女バルイェット』をみていくことにする。

四、「こだま伝説」

「こだま伝説」の採録者は、かってのアボリジナルの土地に侵略した白人の牧場主の妻エセル・ハッセル夫人である。採録は一八八〇年代であった。彼女の生存中にこの採録原稿が公にされることはなかった。子孫のC・W・ハッセル氏が彼女の原稿を整理して、『黄昏の友だち』とタイトルを付して、一九七五年に出版した。この本はいまはもう絶版であり、入手できない。私の手元にあるのは、エセル・ハッセル夫人が「こだま伝説」を採録した折りの状況（原文五頁）および伝説全文（原文五頁）を収めた『黄昏の友だち』の一六章の、十頁にわたるフォトコピーのみである。小文の最後に資料として、

粗筋を付してある。参照していただければ幸いである。

「こだま伝説」は、義兄弟の若者二人の悲劇の原因となった美少女バルイェットの物語でもある。彼女は大部族に生まれた。この大部族は、名ハンターぞろいで裕福であった。近隣諸部族が、大部族とだけは戦うようなはめになりたくない、花嫁には大部族の女性が欲しい、なるべく多くの若者に大部族の若者と義兄弟の契りを結んでもらいたいと思ったのもむりはない。いろいろな名目をつけて若者をどんどん大部族に送りこんだ。いまでいう若者の留学が、部族の安全保障という観点から為されていたのである。

バルイェットを一目見るなり恋に陥った義兄弟二人も、他部族からのいわば留学生だった。しかしバルイェットは、他の多くの留学生たちに対してと同じく、この二人も真剣な恋の対象にはしない。大人になったら（鼻に通した骨を抜いて、成人式を済ませたら）また正式に求婚にいらっしゃい、といってのける。二人の若者はそれを信じて、あらためて求婚に出かけていく。そこでたがいの義兄弟と出くわしてことの成行きを知り、嫉妬を募らせる。

一方バルイェットに、結婚相手が決められた。本人の同意なしにである。婚約者が嫌いだったバルイェットはうさ晴らしに、義兄弟と時間を違えて密会の約束をした。密会の場で二人は鉢合せをし、戦ってはならない二人が殺しあって、あげくどちらも死ぬ。

以上の話のみでも十分に諸部族への戒めとなるだろうが、「こだま伝説」はさらにだめ押しをする。まず掟を破った義兄弟二人は、埋葬してもらえない。死体は放ったらかしである。バルイェットのほうはさらにひどい罰を受ける。死を拒まれるのだ。バルイェットは山々の奥に閉じ込められる。死ぬことができないのだから、絶壁から跳び下りても急流に身を投げても、悪霊に救われてしまう。

バルイェットに許された外界との接触方法は一つだけ、子どもや少女の誘拐だった。日本の神隠しや山うばのごとく、バルイェットは以来迷子になった子を悼む親の恨みを一身に引き受けざるをえないことになる。あるいは、バルイェットの物語は、子どもや少女が神隠しに会わないように注意する効果もあったのかもしれない。ペローの「赤ずきん」が、仏宮廷の行儀見習いの娘たちに夜遊びを禁じる話としての役目を負っていたように。

バルイェットは、口伝を継承してきた地方のアボリジナル部族のことばで、「こだま（エコー）」を意味する。スターリング山地やトゥールナップ山やブラフ山にこだまする物悲しい風の音が響くと、「あれあれ、バルイェットが寂しくて泣いているよ」と解釈される。しみじみ

と哀れな話である。

五、イィルガアの証言

本章では、口伝の採録者エセル・ハッセル夫人にインスピレーションを与えた、ハッセル牧場のアボリジナル女性イィルガアに触れたい。

オーストラリア大陸の西南の端は、ジャワの島々からははるかに遠く、北半球の風も遅れて吹いてきた。ハッセル夫人が開拓者である夫とともにこの地の牧場に住み、口伝を採録したのは一九世紀末である。しかし海岸に近い地理的条件のゆえに、私たちが知ることのない風が気まぐれに吹いた可能性までは否定できない。否定はできないが、吹いたとする証拠もない。

だが一つ、「こだま伝説」が伝承されていた地域で、白人との遭遇の時期が遅かったこと、および、アボリジナルがかなり閉鎖的な暮しを送っていたと信じるに足る証言がある。

アボリジナルの女イィルガアが幼女だったとき、「ブレマー湾の部族を訪ねた折り、そこで（ブレマー湾付近のアボリジナル部族の）みなが生まれてはじめて白人を見た」という。

証言を要約すると次のようになる。

「沖合いに船が停泊した。ボートを下ろして、白人が海岸めざして漕いできた。わたしらはみな慌ててブッシュに身を潜めた。ずっと隠れていて、夜も小さな焚火しか起こさなかった。白人の男たちは、二日ばかり海岸でキャンプを張ったが、また船に戻り去っていった。白人のキャンプ跡に行ってみると、袋に入った茶色くて甘いものが見つかった。いまにして思えば、あれは砂糖だった。」

ちなみに、イィルガアが語った相手の牧場主夫人は、「隠れていないで、出ていって、白人と話をすればよかったのに」と無邪気にいうが、イィルガアは、「奥さんだって、天から赤い男が降ってきたら、どうするね」と突っぱねた。

この地域のアボリジナルは、船を使っていなかった。イィルガアによれば、そしてハッセル夫人の見聞によれば、アボリジナルの船らしきものはまったくないという。川を渡るときは、なるべく川幅の狭いところを選んで、長い杖で深さを確かめながら、歩いて渡った。あるいは丸太に捕まって泳いで渡る。これはよほどのときだけである。海や川の近くに何万年も居住していながら、水に親しんでいなかったらしい。したがって遠洋漁業に出て、異国の人と会う機会もなかっただろう。

またイィルガアによれば、白人が来る前は腰ぐらいまで水に浸かれば、槍で刺して魚はいくらでも捕らえるこ

とができた。食料採集に不自由しなかったために、ポリネシア諸島で始終飢えていた海洋民族とちがって、遠くへ旅をするための船を準備する必要も感じなかったのだろう。白人のもたらした船や大きな網といったものが、沿岸漁業をたちまち困難にしてしまっただろうことは、想像に難くない。

イィルガアは、キャンプの最長老だったというし、休み休みの歩き方などハッセル夫人の描写から察するに、一九世紀初めに生まれて物心ついたころに、白人を見た。船と白人の話だけなら、幼児のときに繰り返し聞かされて、あたかも見たような気になっているという可能性もある。が、「砂糖の甘味に感激したこと」は本人でなければ記憶に留まらないだろうから、事実と思っていいだろう。オーストラリアの入植は一七八八年、シドニー近辺、つまり大陸の東南の角あたりから始まった。当時の技術や船など交通手段の能力からすれば、入植開始後五〇年ほど経って西南沿岸に訪問者あるいは調査人が来たとするイィルガアの話には、信憑性がある。

「こだま伝説」は、夫人が数年かかって複数の部族から聞き書きした。複数の部族に伝わっている理由は、伝説そのものが明らかにしている。「こだま伝説」に夫人が関心を寄せたのは何がきっかけであったのだろうか。エセル・ハッセル夫人の採録の状況を辿ろう。ハッセル夫人は、牧場主の妻で、多くの当時の牧場や農園と同じく、使用人のアボリジナルたちを地所の一角にキャンプを張らせて住まわせていた。このような場合、アボリジナルの使用人に給与を支給することはまれで、小麦粉ほか食料を与えるだけであった。若い女たちは、部族の男の妻であっても牧場の白人の子どもを産むことが多く、混血児は、黒い血の悪いところを受け継がないように母親から引き離されてミッションで育てられることが多かった。しかしハッセル夫人をはじめとして、白人の妻たちは、白人以外は進化の過程にある生き物とみなしていたから、母子離散の悲劇にも無頓着であった。ハッセル夫人は暇にまかせて、牧場に置いているアボリジナルの女たちを引き連れて山々を歩きまわった。それと知らずにフィールドワークをしていたのである。

ある日、ハッセル夫人は、イィルガアだけでなくアボリジナルの女たちとともに、花こう岩の岩山に登ろうとした。その前に一人で散策したときに、澄んだこだまが返ってくるのに感動して、興味をもった。イィルガアは、むしろみなが岩山に登るのを引き留めるためについてきたといってもいい。道中何かとごねて、みなの歩みを阻んだ。夫人はとうとうイィルガアを置いて、さっさと岩山に登る。予想したとおり、すばらしいパノラマが眼下に開けた。アボリジナルふうの呼び声（ヤッホー、おー

い！）は、部族によって異なるが、ハッセル夫人が知っているそれは「ユーアァル」であった。出だしは低く、最後は絶叫するようにかん高く上げる。夫人がそれを叫んだとき、「ユーアァル」はいくつもいくつものこだまとなって響きあい、その繰り返しは長いあいだ続き、恐ろしいほどであった。おとものアボリジナルの女たちはみな逃げだしてしまった。山の麓で待っていたイィルガアは、使用人にしては珍しくこっぴどく夫人を叱りつけたが、夫人はそれに対して怒る気持ちもわかなかった。というよりは、そのために、この尋常でない「こだま」について知りたい気持ちがいっそう強くなったのだろう。白人の好奇心が、いわば貴重な記録を残すことになった一例である。

六、パトリシア・ライトソン

ここに一九二三年、ニュー・サウス・ウェールズ州生まれのパトリシア・ライトソンが登場する。彼女は欧州系の白人入植者の子孫で、オーストラリア奥地で育った。ラジオによる通信放送教育を受け、知的好奇心は父親が町に出たときに購入したディケンズ全集や二冊の「アリス」で満たした。ほとんどそらんじてしまうまで、繰り返し読んだという。やがてクィーンズランド州のセイント・キャサリン・カレッジで学び、シドニーで「スクール・マガジン」の編集長を勤めるようになった下地は、この少女時代の読書体験が作ったと自ら述べている（一九八六、東京）。三〇歳を過ぎてから作家活動に専念することになり、魂の故郷とでもいうべき奥地にひきこもった。以来出版したのは一五冊。ならして二年に一冊しか書かない。寡作の人である。

その彼女が博物館や図書館で埋もれていたアボリジナル口伝をむさぼり読んだのは一九五〇年代だった。そして、アボリジナル伝説の霊を扱った『バニップの穴』（一九五七）と、町っ子の少年少女たちがアボリジナルの呪われた石斧探索の冒険に出る物語『蜜の岩』（一九六〇）を著した。後者のテーマが、アボリジナルの口伝を、そしてアボリジナルの大地を探索するライトソンの三〇年を貫いていることを、その後の作品が語っている。

『蜜の岩』はライトソンをアボリジナル口伝に導いたという意味でも重要な作品だが、それ以上に重要なのはこの作品が白人の少年とアボリジナルの少年の交流を描いたオーストラリア文学史上「最もすぐれた作品」（カーペンター、一九八四）という評価である。それだけでなく「石斧の発見が（オーストラリアが意識下に押し込めようとしていた）人種による違い」を意識の表面に浮かびあがらせたことも重要だろう。その後の名高い二作品『もっと古い魔法』（一九七二）と『星に叫ぶ岩ナル

ガン』（一九七四）を含めて、ライトソンの作品はずっと『蜜の岩』の流れにあり、現代オーストラリア人の普段の暮しとアボリジナル伝承が見事な調和を奏でている。

一九七〇年代後半から八〇年代に見られる大きな変化は、ライトソンが対象とする読者年齢を上げたことである。ライトソンは児童文学作家、読者は小学校中学年からヤング・アダルト（十代後半）までといわれてきた。たしかに『蜜の岩』は小学生が心ときめかせる冒険小説である。しかし「ナルガン」以降九冊目から、ライトソンは若者と大人に向かって語り始めた。「ウィラン・サーガ」の三部作『氷の覇者』（一九七七）、『水の誘い』（一九七八）、『風の勇士』（一九八一）は、一般向けの大長編である。主人公は都会で働くアボリジナルの青年ウィランであり、彼は自然界に棲む岩であったり氷であったりする霊たちと戦う。ウィラン遍歴の原著の英語は大人の読者を想定したものであるし、邦訳もそれにならっている。

八〇年代の次に発表された『ミセス・タッカーと小人ニムビン』（一九八三）、『ムーン・ダークの戦い』（一九八六）そして『いにしえの少女バルイェット』（一九八九）が、ヤング・アダルト向か一般向かは議論がわかれるだろう。私自身は訳者として、この議論に悩まされることはなかった。ただ、ライトソン文学の特長でもある「おもて表紙から裏表紙までが一つの本である。設定を繰り返したり、前に起こったことを改めて説明したりしない」と一般向けの三部作について述べた（ワークショップ、一九八六、東京）一種独特の潔癖な原則は、八〇年代の三冊についても共通している。ライトソンは、七〇年代末から「ウィラン・サーガ」の読者層に語り続けることにしたように思われる。

七、ライトソンのバルイェット

『いにしえの少女バルイェット』の舞台は、物語中では特定されないが、「こだま伝説」を伝えてきたのと同じオーストラリア大陸西南の角である。作者自身が、ハッセル夫人の採録原稿をもとにしていることを、本書のまえがきに記している。本章ではライトソンがバルイェットの物語（やはりまえがきに、「これはバルイェットの物語です」と明言されている）を、どのように活かしているか、「こだま伝説」蘇生のプロセスを辿ろう。

『いにしえの少女バルイェット』は十章に分かれている。一章「時の道」は、「平原からいっきに三千フィートも立ち上がる」連山に向かって、アボリジナルの老女ミセス・ウィレットが車を走らせる場面から始まる。ミセス・ウィレットは、豊じょうの儀式を知るただ一人の女性である。「こだま伝説」にあるように、女性も重要

な儀式のにない手であった部族の生き残りであることが示唆されている。ミセス・ウィレットは定期的に山奥へ入り、ワラビーが生まれるように、ウォーターリリーが育つように、呪術的な力を持つ小石を使って、祈りを捧げ、歌をうたい、踊りをおどる儀式を司る。ただし、その神秘を分かち合う仲間はもう一人もいない。

山々には死者と悲しみが棲んでいる。死者は、ミセス・ウィレットの仲間の部族の民だ。”悲しみ“の正体は、これから明らかになっていく。

ミセス・ウィレットの車の後部座席の敷物の下に、ジョーがひそんでいた。ジョーはまだ中学生の白人の少女。小さいころに、ミセス・ウィレットがベビーシッターをした子である。ミセス・ウィレットに見つかったジョーは、母親が泊まりがけの仕事で寂しいから連れてってと頼む。しかし、のちにこれは方便であり、ジョーは目的を持って仕組んだのだとわかる。伏線として、ジョーが「トリケットの水がめ」と呼ばれる池のことをミセス・ウィレットに問いただす場面と、心のなかで、「自転車なんかでこんな遠くまで来られるものかしら」と思う場面とがある。ミセス・ウィレットは、自分のいうことを聞くと約束するならという条件つきで許し、まず「山へ登ってはいけない」と申し渡す。

一章の終わりに、ジョーが山の中腹にある淀んだ池で水あびをする場面がある。ジョーがはしゃいで、冷たいと叫ぶ声を聞きつけて、山に棲む悲しみが見にやってくるのだ。でも、ジョーは何も気づかない。”いもうと“と、悲しみは呼ぶが、ジョーの耳には入らない。

二章「兄と弟」は、「伝説」に登場する義兄弟ではなく、現代の本物の白人兄弟である。アボリジナルの義兄弟の契りの強さは、現代社会では血によってつながる兄弟のそれに近い。ミセス・ウィレットは予定通り儀式を行うために、ジョーをおいて出ていく。ジョーはおしゃれをして、トリケットの水がめに赴く。そこには自転車で来るはずだった同級生の男の子が、バイクで兄と来ていた。兄は大学生、幻覚作用を起こすキノコの栽培を非合法に行うために、山へ入ったのだ。ジョーは、同級生の男の子が兄と一緒だとは知らなかったので、腹を立てるが、兄の軽妙な応対に心を和ませる。このあたりの山に入っているのは、ジョーたちと兄弟のほかに、鉱物学者の若夫婦と赤ん坊だ。

ジョーたちは三人で、ミセス・ウィレットが禁じた山登りを始める。尾根を登ったところで、ジョーや兄弟が山々に挨拶すると、ジョーの声でこだまが返ってくるので、みな驚き、慌てて山を下る。三人のあとを、霧か霞のようなものが追いかけてきてしめった指で触れてきた。ジョーは何がなし恐ろしくてたまらない。

一方山々にこだまする声をミセス・ウィレットは聞きつけて仰天し、ジョーを探しに出る。ジョーは兄弟と一緒で安全だったから、と弁解する。ミセス・ウィレットは、約束を破ったからには町へ戻すというが、ジョーにもう一度だけチャンスを与えることにする。その夜、「ミセス・ウィレットは、古い言伝えを思いだした。少女のころいらい、ずっと忘れていた物語」が脳裏に浮かぶ。「ミセス・ウィレットは、去ってしまった人々をなつかしく思った。かれらならば耳をかたむけ、理解してくれるだろう。ジョーを求めて、山から山へ走りまわっていたものが、何であったかを知る人々。」そして、焚火が消えると、山を走りまわっていた「山中に棲む悲しみは、もう火を見つめることができなくなった。それで、高い、さびしい場所へただよい去っていった。」

二章では、兄弟と少女の、というより若者の愚行が繰り返され、それに巻き込まれたミセス・ウィレットが言伝え（「こだま伝説」）を思いだし、伝承を分かち合った仲間を懐かしむ。次第に昔と今の境目がぼやけ、山の中にいる人々が、いにしえの少女の網に絡めとられていく流れができつつある。

三章「幼な子」で、ジョーは鉱物学者夫婦が鉱石標本の採集をしているあいだ、幼い男の子のベビーシッターに出かける。しかしそこへ例の兄弟の兄のほうが、バイクに乗せてやると誘いに来る。ジョーが遊んでいるあいだに、男の子が迷子になってしまった。仕事が終わって戻ったミセス・ウィレットも青ざめたジョーを連れて、山へ探しに行く。ある洞穴の前で、ミセス・ウィレットは、あわい霧のたなびきにむかって、「バルイェット！」と呼びかける。「わたしだよ、あんたの仲間、あんたの姉だよ」と。ミセス・ウィレットは洞穴に気を失って倒れている男の子を抱き上げると、ジョーに急いで山を下りて両親に渡しなさいといいつける。

バルイェットの姿が霧のようなものであり、子どもを誘拐し死に至らしめることが明らかにされる章である。ただし、ジョーは年齢相応の正義感で、男の子を迷子にさせたのは自分の罪だと信じこむ。

四章「こだま」は、ジョーの無責任をとがめながらも、まちがいを犯す若者たちを哀れむミセス・ウィレットの心情をつづる。「昔は、そうたいへんではなかった。かっては、もっと助けがえられた。」これは集団で責任を分かち合った口頭伝承の時代を懐かしむミセス・ウィレットの独白である。

ジョーは自責の念にうちひしがれながらも、若さの持つ好奇心を抑えがたく、霧か霞のきれはしのようなものの「ぶきみな泣き声」について問いただす。ミセス・ウィレットはあっさりと、「バルイェットだよ。あわれな

もの」と答える。ジョーのさらに重ねる問いに、「男の子は自分で出ていった。バルイェットは、呼びかけてあやし、歩かせただけ。かわいそうに、さびしいんだね。あんたのように若くて、仲間がおおぜいいるキャンプで暮らしていた。それがいまは、だれもいない。子どもか友だちがほしいんだよ。愛するために」と、バルイェットの誘拐について少し詳しく情報を提供した。

また町へ戻ろうというミセス・ウィレットに対して、ジョーはいやだといいはる。ミセス・ウィレットは、兄弟を来させなければと条件を出して、またジョーに屈服してしまった。ジョーは池で洗濯をしに池へ。そこへ思いがけなく弟のほうが来る。すると、すぐ近くを漂っていたバルイェットが、ジョーの声をこだまのように真似するだけでなく、「兄と弟はあらそうもの」とジョーの頭のなかに吹きこみ、義兄弟が争っているいにしえの場面を再現して見せる。ジョーは、バルイェットの昔そのままの姿も見た。「きれいよ！泣かないで！年よりにいっぱい食わせるためのゲームにすぎなかった。ほんのちょっとのあいだだけの。バルイェット、バルイェット、だれでもそのうち年をとるのだから」と、ジョーは、あたかもバルイェットが乗り移ったように叫ぶ。

五章「生き霊」は、ミセス・ウィレットが池で狂ったように叫んでいるジョーを発見する場面から始まる。このときにはもうジョーははっきりと、「伝説」の細部まで知ってしまった。そして、「おびえてるのよ！さびしいのよ！みんないなくなって、一人ぼっちになったから。ゆうれいじゃないの。生きてる。・・・おばあちゃん、どうか追っぱらわないで！」と頼む。ジョーには思春期の少女の直観で、バルイェットと年よりたちの世代間ギャップ、あるいは個人と集団の相克を理解し、全面的にバルイェットの側に立つ。ミセス・ウィレットにとっては生き霊であっても、ジョーには生身の人間だとしか思えない。それほどバルイェットの問題は、ジョーにとって身近なのだ。そして二人の共通した思いは、「大人は残酷だ」というものである。そのせいで、バルイェットは「風や海のようにうたう男たちの声」も、「年老いた者たちのかたわらにすわ」り、「老いた目が見ていないすきに、ちらりと少女に流し目を送る」若者たちも、「黒ぐろとした目に光るたき火の明りも」剥奪され、山奥に追放されてしまったのだ。

「時間は、大きくゆるやかに円を描いて」いつの時代も変わらない少女のさがで年よりを悩ませるジョー、つまり「もう一人のバルイェットを自分のもとにつれて来た。」一方どうしたらジョーを町へ帰らせることができるかと悩んだ果てにミセス・ウィレットは、食料がほとんど尽きたように小細工を施した。

六章「義兄弟」では、ミセス・ウィレットは、ジョーに聞かれて、義兄弟の契りについて説明する。これは「伝説」の裏づけとなる説明でもある。「この契りがあるから、人々はたがいに信頼することができた。友人いじょうだったのだよ。二人で何かを分けあったら、相手側に自分の分身があるのとおなじだった。それがあるから、戦いをやめることができた。神聖なんだよ、義兄弟というのは。」

そして義兄弟の殺しあいは、「それほど悪いことは、ほかに思いつかない」ほど悪いことだったと、ジョーは知る。知るには知ったが、納得したわけではない。ジョーはかっとなる。「バルイェットがくだらない義兄弟を殺したのではない」というわけだ。「バルイェットは、二人と愛しあったのよ」と弁護する。しかし義兄弟を同時に愛したのは、分別がないことだとミセス・ウィレットも反論する。ジョーの世界では、よくあることなのに。「おばあちゃん、バルイェットはあたしぐらいの年齢だったのよ・・・いろんな男の人とつきあってみなければ、恋をするってことがどんなことかだって、わからないじゃない？みんな、やってることじゃない？」

そして、さらに分別をといいつのるミセス・ウィレットにジョーはいう。「それって、年とった人の口ぐせね。・・・分別をもって、大人になりなさい。・・・いい子にしてて、いわれたとおりにしなさいって、そういう意味なのよ。・・・自分でものをかんがえはじめると、そういうふうにいわれるのよ。」

いろいろと約束を破ったりして、決して優等生ではないジョーだが、それだけに日々大人と衝突して、その分観察が鋭い。ミセス・ウィレットは、ジョーなりの論理に対してただ、「大人になっても、人間は変わらない。年をとるのは、外側だけ。自分がなくなるわけじゃない、いまの自分とおなじまま。ただ、その自分が内側にとじこめられているだけ。いつか、それがわかるよ」という。子どもは、いつかわかるよという大人の論理が嫌いだ。しかし大人は、バルイェットにひどい罰を与えた。山に置き去りにするという、死よりむごい罰だ。ジョーにすれば、不戦を誓う掟を破ったのは、義兄弟のほうだ。しかし、ミセス・ウィレットから、なにしろ千年も前のことだから、いまとは考え方がちがうんだよといわれて仰天する。ジョーにとって、脳裏に入りこんできたバルイェットのイメージは、生々しく鮮烈だったから。

食料の小細工を見破ったジョーは、家へ帰らないといい、若さとやりあってくたびれはてたミセス・ウィレットは倒れるように寝こんでしまう。

七章「二人の少女」で、ジョーとバルイェットは池でふたたび出会う。二人は童心に戻ってかくれんぼをして

遊ぶ。千年のあいだに擦り切れ、すり減ったバルイェットの身体はいまは細く透き通るようで、ジョーの目には、霧のたなびきにしか見えない。そのたなびきは、日光を受けたときだけかすかな影を落とす。バルイェットの腕に抱きしめられたら最期、死に至ることをミセス・ウィレットから聞かされたジョーは、目をこらして霧のたなびきが自分に近づかないように注意している。友情を伝えにきて、その友だちと触れないように注意しなければならない矛盾が、ジョーを不安な恍惚状態に導く。そこへミセス・ウィレットの呼び声が響く。ジョーは救われたように、走って山を下りてしまう。いつもいつも置いてきぼりにされるバルイェットは、「死はどこ？」と泣き声をこだまさせながら、山々を放浪する。

八章「若者」で、いよいよ気まずくなったミセス・ウィレットとジョーのあいだに緊迫感が漂う。そこへ例の兄弟がやってくる。兄弟がジョーから食料を巻き上げようとときたのだと、ミセス・ウィレットは誤解し、「他人の子を食わせ」てはやらないと怒鳴ってしまう。これは集団生活を送っていた時代のアボリジナルの女が知らないせりふ、町の人間のせりふだ。ジョーも兄弟たちも、これで完全にミセス・ウィレットから気持ちが離れる。若者たちは町の子でありながら、心情的にはむしろアボリジナルに近いことが明らかになる場面である。

ジョーは、「老人なんか――がんこで――けち、けちんぼ」と捨てぜりふを叫んで山を登ってしまう。もちろんバルイェットと、頑迷で意地悪な老人から被った被害を嘆きあうためだ。ミセス・ウィレットは、そろそろ暗くなり、バルイェットの影が見えなくなる、ジョーの生命が危ないと思って、呪術に使う小石を持って後を追う。

九章「山」は、章題どおり、山中でのジョーとバルイェットの再会である。バルイェットは傷ついて、すねていた。ジョーが、ミセス・ウィレットに呼ばれるまま自分を置き去りにしてしまったから。ジョーはいっしょうけんめい「やきもちやきの、ばあさんブタ」とミセス・ウィレットの悪口をいって、バルイェットの共感を得ようとする。二人はかくれんぼと鬼ごっこをする。死を恐れる必要のないバルイェットが断然有利だ。しかもバルイェットは、ミセス・ウィレットが岩棚を登ろうとして落ちる場面をジョーの脳裏に吹きこんでよこす。「おばあちゃんを助けなければ。年とってるし、あんなとこから落ちたのだから」というほど、ジョーはバルイェットに対して冷めていく。というより、バルイェットの千年の寂しさ、孤独を理解できるほど、ジョーはまだ大人ではなかったことが露呈される。

山に慣れないジョーは追いつめられた。あと一息で、バルイェットはジョーを腕に抱くことができる。それは

ジョーの死を意味するのだけれど。「さんぜんとかがやく、うるわしい瞬間があるだろう。温もりと若さと友情のきらめく瞬間が――それが去ると、とじこめられた長く暗い時間と、昔からの悲しみが逆流してくる」としても、バルイェットは、ジョーが欲しかった。それは「負けるとしても、闇と悲しみは変わることなくつづくだろう」という状況だからだ。「あたしに、さわって」と、バルイェットはささやく。ジョーのほうから、手を差し伸べてほしいのだ。

「ざんこく」と、バルイェットは、さめざめと泣く。「みな、星のように、無情だ」と。ジョーにはどうすることもできない。一瞬の友情のために、生を犠牲にしてもいいと思うには、ジョーは若すぎる。自身を犠牲にして若者の生命を救おうとするのは、老女のミセス・ウィレットのほうだった。もうすぐ暗くなる。

ジョーは、すぐ間近に来たちらちらする霧のたなびきのなかに、千歳になったバルイェットの素顔を見て叫ぶ。「嘘ついたのね！あんたの内っかわが、年よりなのよ――あんたの年は千歳なのよ！」

そういわれても、バルイェットの理解を超える。「義兄弟は、バルイェットの記憶の中に生きている。いまでも、あざやかに。・・・バルイェット自身はいまでもしぶとくさがしつづけている。このはてしのない時の中で、何一つ変わらなかった。しおたれて、すりきれてきたバルイェット自身いがいは、何も」というのがバルイェット側の真実なのだから。いっそ死をと絶叫するバルイェットの悲鳴が、絶壁にくいこむ。

十章「安らぎの旅へ」は、ミセス・ウィレットがいにしえの知恵を借りて、いにしえの少女を大地の旅へ出してやる終章である。ミセス・ウィレットは、死者の仲間入りをしている師を呼びだして助けを乞う。師はミセス・ウィレットに説明させ、歌をうたわせる。伝承の継承者であったミセス・ウィレットは時代と状況に合わせた変革をと訴える。

「（バルイェットが今でも苦しんでいるのは）正しいことではありません。時代がことなり、掟もことなるのですから。若い男女は、毎日もっと悪いことをしていますが、非難はされません」

だが師は反論する。「正しくはない。けれど、めぐり合わせなのだ。どんな時代にも、めぐり合わせというものはある。よかれあしかれ、それに手出しはできない。めぐり合わせもまた、それ自体が掟なのだ。」さらに、「時は、われわれのだれの手もとどかない掟だ」ともいう。

納得しないミセス・ウィレットの求めに応じて、師は死を呼び出す。しかし死は去ってしまう。「死はバルイ

ェットをこばむ」と師はいうが、つぎに部族の死者の霊を多数呼び出す。そして「あの女（バルイェット）の時を静止させ、わなの中に放置させておいた」ことについて、相談する。死者たちはあくまで、悪い愚かな行動をした女、神聖な掟を破った女を休息（死）の旅につかせることはできないと主張する。ここで師なるアボリジナルの人は、「ほかの旅」を見つけてやってはどうかと提案した。「なぜなら、みな旅人なのだから。われわれも、岩も、雲も、海も。」

死者たちは、話をかわし、最後にみなの意見が一致した。師はいった。「女は山々を旅し、山々に休むことになろう。」このことばの意味は何か。師の次の呼びかけで明らかになる。

「バルイェットよ、陽光の温もり、日陰の霜、風のそよぎ、花の蜜、葉の毒、ヘビの牙になれ。小鳥のさえずりで語り、岩の耳できき、クモの巣のみでとらえよ。水のきらめきにかくれ、陽光の中であれ星明りの中であれ、影は投げるな。そしてこれがさいごの変身であり、バルイェットの真実の姿となろう。この新たな創造によって、バルイェットは休息にむけて旅立つ。」

死者たちも賛成し、「そうさせよう」といっせいにとなえたとたん、「山々に、いつにもまして奥深くゆたかな静寂がおりた。・・・蜜の香りが、マリの森から放たれて、絶壁の上まで昇っていった。何やら陰険でこわいものが、枯葉の中でだいたんにざわざわ音を立てた。そして石の下では、クモの目が、ガラスの破片のようにするどい光をきらめかせた。風がかろやかに、力強く谷を吹きおろし、モズが、澄んだ元気のいいひとふしを奏で、その調べは岩のあいだに共鳴した。」

こうして「バルイェット」の物語、口伝の蘇生の道程も終わりとなる。

パトリシア・ライトソンは、「こだま伝説」を下敷に物語を創作しただけではない。作者の意図は、オーストラリア大地へのアボリジナルの魂の解放にあった。アボリジナルの口伝は消えかかり、テリトリーの聖地は、地下鉱物資源の利権争いに巻き込まれて、多くのアボリジナルが「先祖代々の聖地」と口にしただけで、政治的な野心を持っているとみなされもする息苦しい時代である。「こだま伝説」のこだまですら、町の建設の槌音に消されかねない。だが、ライトソンはオーストラリア大地の生きとし生けるものすべてに、多くの「バルイェット」を入魂する儀式を、小石ならぬ文字をもって司ったのであった。それを行った以上、もう何をすることがあろう。ライトソンが次に著したのが、澄んだシンプルな絵物語だったのも、当然の成行きである。

この章の最後に、ライトソンの口伝に対する姿勢につ

いて触れておきたい。まず、ヨーロッパ系のライトソンがなぜ、アボリジナルの口伝をもとに創作をしてきたか。この疑問に対して、ライトソンはこう答える。「オーストラリアの人々にとって大事なことは、ヨーロッパの民話に出てくる精霊や妖精を、そのまま使うことができないという事実を発見したという点です。民話とは、相互に交換しうるものではなく、土地に住む人々の経験や必要性という根本的には同じ源から出てくるものですから、全ての民話は関連性があるといえます。」（ワークショップ、一九八六、東京）。

ライトソンにとって、アボリジナルの民話や神話という口伝は、オーストラリアの土地に住むすべての人々にとって有効なはずだということである。だから先のアボリジナルの魂の解放も、オーストラリア人すべての魂の解放というのがふさわしいだろう。

次に、創作に使用した口伝についてである。口伝は、伝承させてきた民族以外の人間が、下手にいじると取り返しのつかない誤解を定着させるはめになる。そこで、ライトソンは「口伝全体を守っていくという観点から、私はもうすでに知られている題材からしか情報を集めないことにしたのです。そうすれば少なくとも、私が新たに間違えるという弊害をもたらすことは避けられるからです」と決めたのであった。口伝を継承してきた民族の文化を理解し、民族の耳で口伝を聞く。たとえ採録原稿を読むにしてもそれがライトソンの基本姿勢であった。「そうすればストーリーを引き出すことができるでしょう。私の仕事は、本や資料以外から見いだすことでも、アボリジナルの中で調査することでもありません。それは専門家に任せることなのです。作家の眼を通して真実を知る、それが私の仕事です。」（同）。アボリジナル口伝はよい聞き手を得たといえるだろう。

八、おわりに ――ブッシュに消えたオランダ人

ブッシュ（オーストラリア大陸の下生えの少ないユーカリ樹のそう林）に消えた二人のオランダ人がいる。『距離の暴虐』の著者ブレイニーによれば、一八歳と二四歳の若者である。バタビア号反乱の罰として、死罪か流刑かといわれ、後者を選んだ。彼等はオーストラリア大陸最初の流刑囚、あるいはオーストラリア大陸に自らの意志で移住した最初の白人という栄誉をになっている。注目されるのは、「現地人への贈物、あるいは交換用にと首飾り、鈴、ナイフ、小さな鏡、ニュルンベルクのおもちゃを渡され、いまのジェラルトン近くに上陸させられた」（ブレイニー、一九六六）ことである。二人の若者を流刑にする側は、無人島ではなく現地人が存在することを知っていたし、これらの品々が役立つだろうと知

っていたのである。この情報は、バタビア号の乗り組み員よりも、むしろ簡易裁判の開かれたジャワの現地人から得たものだろう。オーストラリア北岸とジャワのあたりに行き来があったことは知られている。

二人のオランダ人のその後は、ブレイニーにもわからない。バタビア号が座礁したのは一六二九年末、二人が流刑になったのは同じ時期かあるいは翌年初めだろう。今から三世紀半強前のことである。彼等は若い船乗りらしく、「人間の運命なんて見慣れぬところにあるもんだ」（同）と、名言を遺してブッシュへ入っていった。だが、北半球人にとって見慣れぬブッシュも、北岸をテリトリーとするアボリジナル部族にとっては、何万年も慣れ親しんでいた土地であった。彼等が白人をどう迎えたのか、オランダ人は銃を持たされていたのだろうか。三世紀半前、石器文化を営む人々の目に、ニュルンベルクのおもちゃ（が、目に触れたとして）は、どう映っただろう。大いに効を奏したのか、まったく省みられなかったか。もし、土の中から鉛やおもちゃが見つかれば、それらはどんなに多くのことを語ってくれるかと思わざるをえない。一八世紀末にキャプテン・クックがニュージーランド先住民マオリの首長に贈った釘は、つい最近まで、部族の宝物として大切にされていたと、ニュージーランドはオタキ地方の首長から聞いたことがある（一九七九、ウェリントン）。この釘は、北半球からの渡来者とニュージーランド先住民のあいだに架けられるべき象徴的な橋の、基礎工事に打ち込まれた一本の重要な釘とみなされている。オランダの若者が、土産物をもってブッシュに入ったのは、やはり異文化間の架橋工事にそれなりの心準備があったからにちがいない。「人間の運命」を開拓すると宣言した一八歳と二四歳の若者が、死を覚悟していたとは思えないのである。

若者たちがブッシュへ入ってから、三世紀半になる。ここで少しだけ後戻りしてみよう。オーストラリア大陸人アボリジニーズは、一七八八年の入植開始時、日本の二〇倍以上ある土地に、三〇万人が六百から七百の部族にわかれ、使用言語も方言を含めて部族の数ほどあったと推定されている。海面の低下した最終氷河期に、スンダ大陸棚が現れて渡りやすくなった海峡を、約百キロ航海してボルネオ島等から渡来したらしい。その後南下して、深く大陸の中心部、あるいは現在の南オーストラリア州やタスマニア島などに移住したアボリジナル部族が、異部族間接触をのぞいて、異文化遭遇を体験した証拠はない。南緯四〇ー五〇度の暴風雨地帯（ロアリング・フォーティズ）を自由に行き来してオーストラリア大陸に達するのは、アマツバメ（日本ータスマニア）、ミズナギドリ（ベーリング海ーオーストラリア南部）ぐらいの

ものであった（ブレイニー、一九六六）。しかし北の海岸線ぞいをテリトリーとする部族が、ジャワあたりの漁民との接触、あるいは視認をした可能性は大いにある。それは北部準州に伝わる口伝に影響を与えているだろう。ただし、もともとボルネオ島やスラウェシ島出身のアボリジナル部族にとって、ジャワの漁民との接触は、異文化接触より異部族とのそれに近かったかもしれない。海面の低下は二万年前にも起きており、さらにディンゴを伴って五千年ほど前にインド方面からの渡来者もあったと推定されている。北岸のアボリジナル諸部族にとって、ジャワ方面からの風は、彼等の内なる世界に吹くものであった。その強さは、のちの第二の覚醒時の大風とは比べものにならなかっただろう。そんなアボリジナル社会へ突然踏み込んだ二人のオランダ人が、部族の口伝にどのような変化をもたらしたか、その研究は誰も行っていない。しかし以上は、オーストラリア・アボリジナルの口伝は、地域差を念頭において綿密に検証されなければならない理由として心に銘じておかなければならない。

万あるいは千年単位での変化が証される一方、アボリジナル「文化は、四万年前のドーム状コア・スクレーパや八千年前の木製ブーメランに代表されるような古い技術が現代にまで受け継がれているという驚くべき継続性がある」（「事典」一九九〇）ことが明らかにされている。技術の継承は、程度の差こそあれ生活様式の継承の証拠でもある。生活様式の継承は、創刊号試論で述べた口伝の継承の証でもある。とくに無文字民族の場合は、スクレーパなどの生活道具とそれを使用する機会における諸注意の口伝は、相携えて伝えられただろうと仮定できる。三世紀半前のオランダの若者たちとの遭遇は、確固たる継続性の前には微弱なインパクトしかなかったかもしれない。しかしいかに小さな一滴であろうとも、有無を分ける最初の一滴に違いない。

これらの若者たちが、大陸北部の地方の架橋工事にどれだけ関わっているかはわからない。しかし大陸西南部のアボリジナルにとって、ハッセル夫人の気まぐれも、異文化という溝の架橋工事に少なからず貢献したのだし、パトリシア・ライトソンの真実を知ろうとする作家の眼は、一つの橋を完成させた。そしてアボリジナル自身の手になる「先住民文化↔移住者文化」の架橋工事もすすんでいる。オーストラリアは楽しみな国である。

資料　「こだま伝説」

伝説の全文は、ここにまとめたものの三倍近い長さがある。また本資料の使用言語は英語であり、伝統的な語り方を辿ることはできない。しかしアポリジナルの一部族が用意周到に準備していた「生存の知恵」が、わかる内容である。

「昔、強大な部族があった。連なる山々の裾野に住み、知恵のある大長老に率いられていた。賢い女と呼ばれる女性が数人いて、すぐれた魔法の力を秘めた小石の数々を保管していた。近隣の部族から、”賢い女たちのもとで、小石の掟について教えを学ばせたい。ついてはわが部族の少年少女を受け入れて修行させてくれまいか“と、ひっきりなしに要請があった。大部族は快く引き受けた。このようにして、大部族は近隣の部族と親交を深め、多くの若者たちが訪れてきた若者たちと義兄弟の契りを結ぶようになった。

大部族には、狩りの名手がそろっていたから裕福でもあった。女たちはよく肥えて走るのも早く、すばらしいカンガルー皮のマントを羽織り、新しい籠にはいつもポッサムの毛が溢れんばかり。その毛を紡いで男たちのベルトや腕輪やヘアバンドを編み、汚れないうちに新しいのと取り替えてやった。どの部族の男も、大部族の若い女を花嫁に望んだ。

なかでもバルイェットは、まだほんの少女ながら、きわだって美しかった。幼少の頃に決められた婚約者は早死にしたので、バルイェットは気ままに暮らし、修行に来る他部族の少年たちと遊びまわっていた。

ある日、二人の若者が、山の向こうからやってきた。この二人は、出身部族は異なるが、義兄弟の契りを結んで旅に出たのだった。二人の背中には、山の向こうの部族を訪れたしるしがついていた。二人は大部族のもとに一年間留まって、そのあいだに大部族の若者二人と義兄弟になり、そのしるしを胸に刻むことを希望していた。大部族は、部族のしるしを右胸に刻む習わしだった。

二人の若者は、美少女バルイェットに会うなりたちまち魅かれた。狩りへ出るたびに、豪華な毛皮をバルイェットに捧げる。バルイェットは毛で腕輪やベルトを編み、二人に贈った。二人ともが、自分こそ選ばれた恋人だと信じこんでいた。

一年経った。若者たちは、めでたく大部族の若者と義兄弟の契りを交わし、出発するまぎわ、それぞれこっそりと、バルイェットに求婚した。バルイェットは、二人ともに同じ返事をした。

”あたしが結婚したいのは、一人前の男なの。だから

鼻に刺してある骨を抜いたら（成人式が済んだら）、戻ってきてね。あんたは腕のいい狩人だから、求婚を受けるわ。“

さて、それぞれ自分の部族に戻った若者は、部族の長老に伴われてまたバルイェットを訪れ、そこで鉢合せした。義兄弟である二人の若者は再会を喜んだが、目的が同じであることを知り、二人の間に嫉妬の炎が燃え上がった。バルイェットのほうは、好きな男ができていたので、どちらとも結婚する気はなかった。ただし、好きな男はバルイェットを疎んじた。ところがバルイェットに結婚相手を決める話が持ち上がり、バルイェットは満月の夜に結婚しなさいと申し渡された。二人の若者は自分の部族のもとへ帰るがよいと、長老たちが取り決めた。

バルイェットは決められた結婚相手が大嫌いだった。そして義兄弟は、それぞれ自分のほうが好かれているといまだに信じていた。バルイェットは、二人の出発日の前夜、山中の密会の約束をした。一人の若者とは月の入りの直後に、もう一人とは日の出の直前に。ところが最初の密会が長びき、一人目がいるうちに、二人目が来てしまった。後から来た若者は、バルイェットと親しく会っている義兄弟を見つけて、かっとなり組み付いた。二人はたがいの投げ槍を抑え、もう一方の手に持った棍棒で、組み合ったまま叩き合った。

バルイェットは二人を引き離そうとしたが、二人はますます力をこめて叩き合う。バルイェットは部族の仲間が寝ているキャンプに駆け戻り、助けを求めた。部族の民が駆けつけてみると、義兄弟は、組み合ったままこと切れていた。長老たちは、黙ってバルイェットを指さした。バルイェットが釈明しても、誰も何も答えない。ついにバルイェットは身をひるがえして、山を駆け登った。

長老たちと賢い女たちは、長いあいだ議論をした。

助け合う義務を負う義兄弟の立場で、たがいに殺し合うという大罪を犯した若者たちなど、葬ってやることはできない。大罪の原因となったバルイェットを、部族の民としておくことはできない。バルイェットの罪は、太陽のもとにある死者の国に行くよりも厳しい罰に値する。

”バルイェットは連山に追放する。そして、部族という部族にバルイェットの話を広める。“ これが結論だった。

日が暮れかかり、バルイェットは山から下りてきた。義兄弟の遺体は放置されたまま。キャンプに下りてみたが、人っ子一人いない。それどころかキャンプは焼かれ、跡かたもない。大悪霊が、バルイェットに、罰を申し渡した。二度とふたたび、山を下りることはできない。結婚も子を持つことも許されない。大悪霊は、バルイェットが山の中で生き続けるように保護はするが、それはバ

ルイェットを決して死なせないようにである。バルイェットの霊ほど邪悪な霊は、いかに大悪霊でも欲しない、と。

バルイェットに許されたのは、山中を険しい崖であれ急流の上であれ軽がると移動できること、大声で叫ぶこと、バルイェットの影が映る日没までなら幼い子どもたちを谷の奥へ誘うことである。

バルイェットはそれから甘い声でささやいては子どもを山奥へ誘いこんだ。ところが、バルイェットが子どもを自分の冷たい胸に押し付けたとたん、子どもは声も上げないで死んでしまった。子どもが冷たく硬直したことが伝わってきてはじめて、バルイェットは子どもが死んだことを知るのである。そうするとバルイェットは、子どもの遺骸を放り投げ、泣き叫びながら山々を走りまわる。バルイェットは寂しさのあまり、少女たちを山へ誘いこむこともある。少女たちが近づくと、霞の網をふんわり投げかけて抱擁する。まれに霞の抱擁を逃れた少女も、あとで必ず身体の具合いが悪くなり、完全に回復することは決してない。」

参考図書および引用の出典

Hassell, Mrs. Ethel, *My Dusky Friends*, 1975

Wrightson, Patricia　パトリシア・ライトソン

Balyet, 1989

『いにしえの少女バルイェット』

（百々佑利子訳、岩波書店）

The Bunyip Hole, 1957, Puffin

The Rocks of Honey, 1960, Angus & Robertson

An Older Kind of Magic, 1972, Hutchinson

The Nargun and the Stars, 1974

『星に叫ぶ岩ナルガン』（猪熊葉子訳、評論社）

The Ice is Coming, 1977

『氷の覇者』（渡辺南海子訳、早川書房）

The Dark Bright Water, 1978

『水の誘い』（渡辺南海子訳、早川書房）

Behind the Wind, 1981

『風の勇士』（渡辺南海子訳、早川書房）

A Little Fear, 1983

『ミセス・タッカーと小人ニムビン』

（百々佑利子訳、岩波書店）

Moon-Dark, 1986
『ムーン・ダークの戦い』
（百々佑利子訳、岩波書店）
Carpenter & Prichard, *The Oxford Companion to Children's Literature*, 1984
ジョフリ・ブレイニー『距離の暴虐』長坂、小林訳、
サイマル出版会、一九八〇年
"パトリシア・ライトソンを囲むワークショップ"「南半球評論」三号、オーストラリア・ニュージーランド
文学会、一九八六年
越智、百々他監修「オセアニアを知る事典」、平凡社、
一九九〇年